

平成 30 年 4 月 2 日

京口門だより NO. 54

今年の桜は早く咲いて、早く散っているようで、なにかおかしい感じがします。暖かい日が続くと思えば、肌寒い日もあります。「花冷えの旅のコーヒー匙重たし」[楠本憲吉]

最近診せていただいた患者さんは、ときどき左の胸痛をきたすようになり、ある循環器専門病院にて心臓の冠状動脈が攣縮をおこす狭心症(異型狭心症)と診断を受け、ニトロールという血管を開く作用のある舌下錠を処方されたようですが、この薬を用いると頭痛や吐き気、メマイがおこり、とても気分が悪くなるようで、そのドクターにそのことを訴えたら、「そんなはずはない。もう少し続けなさい」と言われ、ふたたびニトロをのむとまた同じ症状がおこるので、とても飲めないと訴えても聞いてもらえないとのことでした。一体これはどういうことでしょうか。患者さんが訴えても聞く耳をもたないとは?

心臓の冠状動脈拡張剤はいろいろな薬剤があり、舌下錠以外にもいろいろな剤型があり、たとえば皮膚に貼りつけるようなものもあります。またニトロだけでなくほかの違った薬もあるようです。どうしてそのようなことを検討されないのでしょうか。不思議です。幸いこの方はニトロを用いなくても、漢方薬の服用で胸痛は少しずつ改善してきました。

最近の現代医薬品は早く効き、強力な作用をもっています。それだけにいろいろな副作用も多くなります。また、何種類もいっしょに使いますと、さらに好ましくない作用も出てきます。そのようなことを良く理解して処方されるドクターなら安心ですが、病気や症状を取り除くためには、少々の副作用は耐えてもらわなければならないという方針を取られますと、治療を受ける患者さんは苦痛を強いられることにもなります。言いかえれば、ガイドラインという一般的な治療原則にしたがって治療をすることが、一人一人の患者さんの違いを軽視することになりかねません。同じ病気や症状でも人によって反応が異なっています。よく訴えの内容を聞きとり、それぞれの状態に合った治療を選択することが、良い医療をおこなう施術者と言えるでしょう。

現代医学とは異なった考え方をする漢方医療は、長い歴史の上にたって、一人一人の性質に寄りそった治療を選択するところに特色があります。現代医学も優れた医療ですが、それで悩むことがあれば、漢方治療もひとつの選択肢です。

